
モンスターハンター 朱空の物語

桜クライアント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター 朱空の物語

【Nコード】

N3407E

【作者名】

桜クライアント

【あらすじ】

新米ハンターのヘルダは、やっとイヤンクックを倒し終わり、念願のブレイズブレイドのために鉱石掘りを続けていた。そして鉱石を掘り終え家に帰った。

第1話・竜玉・（前書き）

ゲーム版のモンスターハンターには存在しない武器が現れたりします。

なるべく忠実に書いてゆくつもりです。

多少衝撃的、およびグロテスクな表現を使う場合がありますので、お嫌いな方は戻る、および左キー等を押して戻ってください。

では、楽しんでいただければ何よりです。
どうぞ。

第1話・竜玉・

ふう…

「ちくしょう。ここじゃあもう鉱石は取れねえかな」

ピッケルを肩に背負い直し、大きくため息をつく。

ついこの間

『2008年度 武器カタログ』に載っていたブレイズブレードという武器に一目惚れし、俺はブレイズブレードをつくろうと躍起になっていたところなわけだ。

「しかし…氷の結晶なんかなかないよなあ」

俺はいま、とある密林に採集しにきている。

最近はやつとヤンクックを倒せるようになったところで、いまちようどヤンクックを倒し終わり、採集に夢中になっているというわけだ。

「ふああ…ああ…つく………」

眠い。

「………帰るかー」

ここからキャンプまでは意外と距離がある。

モドリ玉使うか。

緑色の玉をポーチから取り出し、地面に思い切りたたきつけた。

さて、ネコタクチケットは…っど…。

ポーチの中を探り、ネコタクチケットを取り出す。

ネコタクチケットを納品物品入れに入れると、どこからともなくアイルーが飛んでくる。

「ぶにやつ！採集終了ですかニヤ？」

「うん。わざわざありがとう」

「いえいえ！これがわれわれのお仕事なのですニヤ！」

アイルーはそう言ったあと、大きく鳴いた。

「では、ギルドに戻ってくださいニヤ。報酬品等は向こうでお渡ししますニヤ」

「ありがとう。じゃあ先に帰らせてもらっよう」

「はいですニヤ！クエストクリアですニヤ！」

そういうとアイルーは腰に携えたポーチから契約書を取り出し、自分の肉球のスタンプをぼんと押した。

ギルド内部へ集会所へ

俺がギルドへと戻ってくると、がやがやとハンターたちが雑談やら情報交換やらを楽しんでいた。

「おーう！デゾオールトんとこの息子じゃねえか！クエスト帰りかい？」

豪快なおやつさんが俺に笑いながら話しかけてくる。

「そうだよおやつさん。でもその名前で呼ぶなって言ってるんだろ？」

「がっははははは！！なんでえ！おめえの親父さんはいいハンターだったぜえ！その名前に誇りを持ちなア！」

「親父の七光りじゃねえか。気に喰わねえんだよ！俺はヘルダだ！へ、ル、ダ！」

「デゾオールトの息子に違いやねえやな！！がっはははははは！」

「…はあ、あんま飲みすぎんなよおやつさん」

とりあえず報酬をもらいに受付へ行くことにしよう。

「…つつかれたあー」

「お疲れ様でした。これが今回の報酬です」

受付嬢にそういわれ、報酬を受け取る。

「…4500Zか…まあまあかなあ…」

「それはそうと、今度一緒にお茶でもどう？」

「お断りいたします」

語尾にハートでもつきそうな勢いの笑顔で見事に断られた。

いつものことだし気にしないけど。

「素材報酬は後ほどお送りいたしますので、ご自宅にてお待ちください」

相槌を打ち、家に戻った。

「ただいまトンカツ」

そう呼ぶとぶひいと、ブタにしては少し高い声でトンカツが迎えてくれた。

ふう…

ベッドに腰掛け、アイルーがくるのを待つ。

「ただいまですニヤ！ご主人様！」

「おかえりナタリー。どうだった？」

背中に大量の素材を背負ったアイルーが窓に立っていた。

「ぼちぼちですニヤ。耳が壊れていたようなので剥ぎ取り許可が降りましてニヤ。『怪鳥の耳』ですニヤ」

「うお、すげー。結構珍しいぞこれ。やったなおい」

褒められて光栄ですニヤと胸を張ってナタリーは言った。

「あとは…『火炎袋』がひとつ、鱗は3枚ほどですニヤ。甲殻は傷つきすぎていて使えませんでしたので剥ぎ取り許可が降りませんでしたニヤ。クチバシを丸ごと持っていこうと思いましたが…下顎に微量の傷が見られたため、これも許可が下りませんでしたニヤ」

「うーん…あんまりいい素材はないのかあ…残念だったな。いいよ、ナタリーそこに置いておいて」

了解ですニヤというナタリーは荷物をその場に下ろし、部屋の隅っここで寝始めた。

んー…まあ荷物を見るか。

……ん？これは…？

「ナタリー？この丸いのはなんだ？」

「へっ！？あ、それは落ちていたので拾ってきましたニヤ！きれいな玉だったのおもわず…」

…確かにきれいだ。

吸い込まれそうな透き通った緑色をしていた。

「まあいいや。じゃあ鍛冶屋にいつてくるよ」

そういつて家を出た。

「親方ー！？親方ー！いねえのー？」

大きな声で呼び続けること3分ほど。

中で聞こえていた鉄をたたく音が消え、バタバタと走ってくる音が聞こえた。

「あいよ、おう。ヘルダじゃねえか。どうした」

「これなんだけど、見てくれる？」

ん？と怪訝そうな顔を浮かべた親方に俺はネコが拾ってきたきれいな玉を見せた。

すると親方は驚いたような顔で

「…こりゃあ…竜玉か…？どうして…こんなもん」

「ナタリーが拾ってきたんだ。なんかいい武器にならねえかな？ 親方」

「いやいや待て待て。うん…こりゃあずいぶん良質な竜玉だ…待つてろ」

そういうと親方は、中に戻っていつてしまい、俺は取り残されてしまった。

しばらくまつと、あった！という声が聞こえてきて、そのあとにまたバタバタと走る音が聞こえた。

「…ヘルダ、これだ。これになるぜ」

それはまるで古文書のような古ぼけた本で、俺は何が書いてあるのかよくわからなかった。

「…なんだよこれ」

「これだよ、これ。いつだか師匠にもらった古代文献に竜玉を使う武器があつたんだ。それがこれだ」

そこに描いてあつた武器は

「竜碎…剣？ 珠…舞……」

そこには、柄の7倍はありそうな両刃を携えた大剣が描かれていた。

「そつ！ 竜碎剣 - 珠舞 - だ！」

「まさか、これを打てる日が来るなんてなあ…くう…ヘルダ！ぜひ俺にこいつを作らせてくれ！頼む！」

「いやいや、俺こそ頼むよ。こんな強そうな武器。俺だつてほしい。けど、素材はどうなんだ？意外といいもん使うんだろ？俺じゃあ…」

「平気だ。こいつの精製に必要なモンスターの濃汁はこのまへの余りがあるし、大地の結晶なら腐るほどあらあな！ひつようなのは…鉄鉱石だな…10cmほどの塊が10個もありやなんとか」

鉄鉱石なら…

「あるぜ…ブレイズブレイド作ろうとおもってたんだが…頼んでいいかい？親方」

任せろ！！と親方は言った。

この剣が。

このひとつの竜玉が。

俺の人生を、大きく変えることになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3407e/>

モンスターハンター 朱空の物語

2010年10月9日12時53分発行